

平家物語 敦盛の最期

（口語訳）

波打ちぎわに上がろうとするところに、（熊谷は馬を）並べてむずと組んでどしんと落ち、取り押さえつけて首をとろうと甲を仰向けにして（顔を）見ると、年十六、七ぐらいの（若武者）が、薄化粧をして、歯を黒く染めている。わが子の小次郎の年くらいで、容貌がまことに美しかったので、どこに刀を突き刺したらよいかわからない。

「いったいどういう身分のおかたでいらっしゃいますか。お名のりください。お助け申しましょう。」

と申すと、

「おまえは誰か。」

とおたずねになる。

「名のるほどの者ではありませんが、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実。」と名のり申しあげる。

「では、おまえに向かつては名のるまいぞ。おまえにとっては（私は）よい敵だぞ。名のらなくても首をとって人に尋ねてみる。（自分を）見知っているであろう。」

とおっしゃった。

熊谷は、「ああ、立派な將軍だ。この人一人をお討ち申したとしても、負けるはずのいくさに勝つわけでもない。またお討ち申さなくても、勝つはずのいくさに負けることもまさかあるまい。小次郎が軽い傷を負ったのさえ、直実は（親として）つらく思うのに、この殿の父が、（わが子が）討たれたと聞いて、どれほどお嘆きになることだろう。ああお助け申したい。」と思つて、後ろをさつと見ると、土肥、梶原が五十騎ほどで続いている。熊谷が涙をおさえて申したことは、

「お助け申そうとは存じますが、味方の軍勢が、たくさん集まつてきています。とうていお逃げになれますまい。他の者の手におかけするよりも、同じことなら、直実の手におかけして、死後のご供養をしてさしあげましょう。」

と申したので、

「ただ早く早く首をとれ。」
とおっしゃった。

熊谷はあまりにかわいそうで、どこに刀を突き刺したらいいかわからないで、目もくらみ正気もなくなつてしまい、前後不覚に思われたが、そうしてばかりもいられないことなので、泣く泣く首を切つてしまった。

「ああ、弓矢を取る身ほど残念なものはない。武芸の家に生まれていなければ、どうしてこのようなつらいめに遭うことがあるうか。心なくもお討ち申したものだなあ。」

とくどくど繰り返して、袖を顔に押しあててさめざめと泣いていた。

やや長い時間がたつて、そうしてばかりもいられないので、（大將軍の）よろいびたたれ鎧直垂をとって、首を包もうとしたところ、錦の袋に入れた笛を、こし腰に（この若者は）お差しになっていた。

「ああかわいそうだ、今日の明け方、城の内で音楽をなさっていたのは、この人たちでいらっしやったのだなあ。現在味方に、東国の兵は何万騎あるだろうが、いくさの陣にじん笛を持つ人はまさかあるまい。自分の高い人は、やはり優雅であるなあ。」

と言って九郎御曹司義経に（首とともに笛を）お見せ申したところ、これを見る者は、みな涙を流さないということはない。

あとになって聞くと、修理大夫経盛の子息で大夫敦盛といつて、生年十七になっていらっしやった。（まさに）その時から、熊谷の仏門に入つて僧になろうという思いはますます強くなった。

【参考】

扇おうぎの的

（口語訳）

時は二月十八日の午後六時頃ころのことであるが、ちようどその時北風が激しく吹いて、磯いそに打ち寄せる波も高かった。舟ふねは、波に揺られてゆらゆらと揺れ動いているので、扇も竿さおにしっかりとまらずひらひらと動いている。沖では平家が、舟を一面に並べて見物している。陸では源氏げんじが、馬のくつわを並べてこれを見ている。どちらも晴れがましい。与一よいちは、目を閉じて、

「南無八幡大菩薩なむはちまんたいぼさつ、わが国の神々の、日光の権現にっこう ごんげん、宇都宮大明神うつのみやだいみょうじん、那須の湯泉大明神なげんだいみょうじん、どうか、あの扇のまん中を射させてください。これを失敗すれば、弓を折り自害して、人に二度と顔を合わせることはできません。もう一度私を本国へ迎えようとお思いでしたら、この矢を外させないでください。」

と、心の中で祈りいの、目を見開くと、風も少し弱くなり、扇も射やすそうになった。

与一は、鎬矢かぶらやを取って弓につがえ、十分に引きしぼって、ひゅうと放った。小兵こひょうということで、矢は十二束三伏そくみつぶせだが、弓は強く、鎬矢は浦一帯うらに響くほど長く鳴り続けて、誤りなく扇の要かなめのきわか

ら一寸ほど離れたところを、ひいふつと射切った。鎬矢は海へ入り、扇は空へ舞ま上がった。しばらくは空に舞っていたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつと散ってしまった。夕日が輝かがやいている中に、金の日輪を描えがいた真つ赤な扇が、白い波の上に漂ただよい、浮ういたり沈しずんだり揺れていたので、沖では平家が、舟端ふなばたをたたいて感心してほめたたえた。陸では源氏が、えびらをたたいてどよめいた。

あまりのおもしろさに感に堪たえなかったのかと思われて、舟の中から五十ぐらいの男で、黒革くろかわおどしの鎧よろいを着て、白柄しらえの長刀ながなたを持った者が、扇を立ててあつた所に立って舞いだした。伊勢三郎義盛は、与一の後ろに馬で近寄り、

「ご命令だ。あれを射なさい。」

と言ったので、今度は中差なかざしという矢を取って弓につがえて、引きしぼってその人の首の骨を射て、舟底へ逆さまに射倒いたおした。平家のほうは音もしない。源氏のほうはえびらをたたいてどよめいた。

「ああ射た。」

と言う人がおり、また、

「情け知らずだ。」

と言う者もいる。